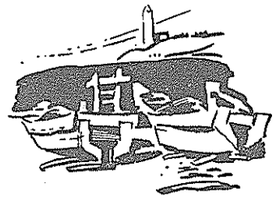
同和教育シリーズ ⑭



部落解放への道

解放運動の歩み 1

明治になって四民平等の世となったといわれますが、じっさいは本当の平等が実現されたわけではありません。

徳川時代のような身分はなくなりましたが、天皇を最高の身分として、その下に皇族、華族という特権身分がつくられ、政治、経済の上で著しく優遇され、武士は士族とされその下に平民身分がつくられたのです。

部落の人たちも平民にされましたが、社会的には新しく平民になったというので、いちだん低くみられていやしめられました。

このことは、封建的身分はなくなったが、新しい身分として再編成され、皇族、華族という「人の上の人」の身分がつくられ、特権が与えられるような非民主的な仕組みの社会のもとで不当に差別される「人の下の人」が残ることになったのです。

明治十年頃から、土佐の板垣退助などを中心にして自由民権の運動が全国におこりました。そのなかで自由と権利をもとめる運動と、身分差別をなくする運動が結びついて部落の人の心にくいこんで部落のなかからもこの運動に参加する者が出てきました。言論人の中からもこの運動を支持する先覚者があらわれ、そのなかでも土佐出身の中江兆民や植木枝盛などは、きわめてすぐれた意見を述べて注目されました。しかし、一般国民のなかには部落に対する誤った偏見から部落を襲げきして焼打ちや殺傷事件なども、あちこちでおこりました。また、明治二十二年には広島控訴院で夫が妻に部落出身であることをかくして結婚したのはいけないとして離婚が認められる差別裁判が行なわれたりしましたが、このようなことにも負けず部落の人びとは、自由民権運動を背景に解放令を名目だけにしないためには部落民が団結して運動することが大切だとよびかけ明治二十二年には、福岡を中心に九州平民会が結成されました。また、岡山県でも明治三十五年に備作平民会が組織され全国各地にこのような組織がつくられました。

明治三十六年には、全国的な部落改善運動を目的にした「大日本同胞融和会」が大阪でつくられ高知県からもこれに参加しております。この当時の社会的背景は、資本主義の発展とともに日本は海外の市場や資源をもとめて朝鮮や中国にむけて進出しました。国内には民族主義の立場にたつ侵略思想がたかまり、国民の間に朝鮮人や中国人に対する軽侮思想が生まれ、特に国力の弱い朝鮮をあなどりました。

幕末までは先進国として尊敬していた中国人をも、日清戦争後はひどく見下すようになりました。この中国、朝鮮への民族差別感情に比例して部落に対する偏見が強められ、これと結びついて部落の人の先祖は、中国や朝鮮から来た人だといった説が流され次第に国民の間に植えつけられていきました。

昔なつかしい地引網と塩からの味

西村繁行（浜改田）

つい先頃まで閑古鳥のなくような淋しい浜辺にも、この所シラスバッチのシーズンオフと共に久しぶりに見る地引網の引く姿がチラホラと見掛けられる。

戦中、戦後通じてずい分活況だった地引網も、漁業の近代化と共に機械バッチに変ってもう久しい。活況だったその当時を思えば今のもの淋しさはおおうべきもないが。

戦後、何もない時代、私たちの生活の糧であり、欠くことのできなかった地引網。

〝引子〟として貧しく、ぼろをまとい黒潮によごれて網を引く、大漁ともなれば浜は活気に満ちていた。男たちは祝酒をチリメンジャコ「酢づけ」にして、のみかわし、その喜びを満面に浮べながら「今日はよかったねや」と互に酒をのむ姿は、今はもう昔の語り草。ユーモアがあり、また楽しかった。

不漁の折、今は見掛ることのむずかしい浜草履に入れてもらって帰る「わずかばかりのチリメンジャコ」田舎造りの醤油箱（ショイノミ）で炊いた「塩からの味」はまた格別で、私たちの脳裏からはなれない。

一ヵ年の大半を地引網と共に生きてきたときには、銀鱗の群なす海、朝な夕なの美しい海、はるか彼方の水平線を見つめながら、やっぱり海は無限の頼もしさがある。

戦後、何もない時代「褌一つが財産」の私たちの生活は、誠に苦しかったが、でも若さがあり、希望あり、また楽しかった。

あれから幾星霜、あの当時元気だった先輩たちも、次から次へと過去の人となり、漁友だちもすっかりよい年輩となった。

時代は流れ、海岸線もずい分変った。うち続く防波堤、園芸ビニールハウスの群、時代は私たちの身の廻りの環境をも変え、人の心までも変えた。

何もない時代から、豊富な時代物価狂乱の時代へ目まぐるしく変る世相の中。

戦後の苦しい社会の底辺にあった「網引き」。ずい分悲しい思いもしたが、命ながらえ今日の日まで、人間的にも経済的すべて、何んの進歩もない私。

今だ底辺の零細漁業と低迷、でも私たちには、広い美しい海美しい空、黒潮の香りのするよい環境に恵まれ幸である。

苦しかったあの頃、今の暗い世相の時代と比較し、交叉する頭の中の今日この頃の私ですがやはり、あの頃「褌一つ」で一生懸命働いて、そしてたくましかった漁師、若者たちの純すいな姿が思い出されてなりません

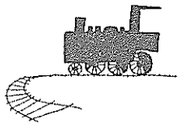
た。

このころの部落は、全体的に貧しく、仕事や教育の面でも社会から立ち遅れ、また、その貧しさと長年月の社会からの圧迫のため、ときには卑屈になって差別を運命と考え泣き寝入りしたり、ときには放従粗暴となって自らを傷けるような行動をとる者もあり、それがまた社会からの差別の再生産になりましたので、この状態を何とか改めようとして部落の一部の有産階級の人たちが集まって前記のような組織をつくって自主的な改善運動にとりくんだのです。

これらの会は、差別されるのは部落民自身に原因があるので、部落の人たちの自覚を高め差別されないようにするため、道徳の修養、風俗の矯正、教育の奨励、衛生の注意、勤倹貯蓄などをすすめたのです。この運動が部落の有産階級の人を中心に自分たちの生活を改めることによって社会に融けあっていこうという、いわゆる融和運動にとどまり、差別や貧困を生みだしている根本の問題にふれて社会的差別と真に対決しようとするところまでいかず大衆的な部落解放運動として発展しませんでした。

いっぽう政府は、これら部落の人たちの自覚運動に着目し「同情融和」の政策をうちだし、大正三年に政府の音頭で「帝国公道会」をつくり全国にその組織を広めましたが、かけ声だけの運動に終わり、部落の社会的低位性を高めることもできず、国民大衆の部落の人たちに対する差別意識を変革することもできませんでした。

大切な資源



資源を考えてみると、これは地球いっぱいがすべてである。

物を使って外に捨てていたなら地球そのものがなくなる。使い捨ては〝美徳なり〟の言葉こそ捨てなくてはならない。

日本中が、いや世界中が困っている問題に人糞尿がある。

大部分を海に捨て、海を汚ごしている。日本の農家は、終戦後しばらくの間は大切な肥料であった。我々の食べた食物が下肥となって土にもどって食糧となり、人々は生き続けてきた。

実に立派な資源の活用であった。

今では、農家においてすら、下肥を使うのはまれで、オール科学肥料である。科学肥料と下肥で大根を作ってみると、各段のちがいで下肥の方ができが良い。味も良い。

神代の昔から、地力を保ち単位面積当り世界一の収量をあげてきたのは、下肥の利用であったといっても過言ではない。この大切な資源を水洗トイレで川に流し、よごし、海に捨てて汚がしている。いまに必ず困ったことが起きてくるだろう。

現実に日本各地で、地力が落ち収量が落ちつつあることが確認されつつある。

人糞尿には、科学肥料にない何ものかがある。おそらく人糞尿のごとき完全な肥料は、科学肥料ではできないだろう。

みんなで、いま一度考えてみる必要がある。

藤本茂樹（田村）